文部科学省
IB教育推進コンソーシアム

TEACHER TESTIMONIAL

菅沼夏未氏（加藤学園暁秀中学校高等学校）

加藤学園バイリンガルコース（中１ＭＹＰ／高２ＤＰ）、レギュラーコース特別選抜クラス（中１国語）を担当。ＥＥ（課題論文）は３名の生徒を担当し、中１の担任も持っている。

「ＩＢは生徒も教師もエネルギーが必要。その分、このプログラムを通して得られることは大きい」

ＩＢでの学びには、自分らしさを出せる楽しさがある

私は父の仕事の関係で、小学５年生から中学３年生までイギリスの現地校に通い、高校入学に合わせて帰国して暁秀高校バイリンガルコースに入学しました。高１でＭＹＰを１年、高２からＤＰを２年履修し、生徒の頃はつらかった記憶もありますが、小学５年生でイギリスに渡ったため、日本語が怪しくなり、英語もまだ流暢ではなかったため、ＩＢで両方の言語を鍛えてもらい、バイリンガルになれたと思っています。イギリスの教育とＩＢの教育では、課題の種類が全く違いました。イギリスでは、日本のように問題を出されて、答えを出すということが多かった一方、ＩＢでは自分で問いを設定して、自分でその問いへのアプローチの仕方や発表形式も考えるというものが多く、最初は戸惑いもありましたが、慣れてくると自分らしさを出せるので楽しく感じる部分もありました。

私の学年は半分が帰国子女、半分がイマージョンクラスから上がってきた子で構成されていました。多様な考えを受け入れてくれるクラスだったので、議論中心の授業のなかで、いろいろなバックグラウンドの子と意見交換でき、有意義な時間を過ごせました。国内の大学にはＩＢ入試を使って進学しました。ＩＢで学んだ Japanese が面白かったため、大学では文学を専攻しました。文学研究の楽しさに取りつかれてしまい、大学卒業後は大学院に進むことにしました。大学では外国の文学も学びましたが、大学院では専門性を高めるため、日本文学を選択し、室生犀星の詩について研究しました。そして博士課程に進もうとしていたタイミングで、高校時代の恩師から声がかかり、これもご縁かなと思い、いつかは教育に携わりたいと思っていたこともあって、ＩＢ教員として母校に戻ることにしました。

ＩＢの教育には、子ども達が教師の想定を超えた考えを導き出す楽しさがある

最終的にＤＰの取得が目標になるため、課題への取り組み方や学問の誠実性への意識など、中１から積み重ねていかなければならないことが多いと感じています。国語では文学分析が重要になるため、中１からその下地に触れてもらい、生徒が慣れていけるように授業をデザインしています。それでも、自分が意図したとおりに生徒が理解しきれないことは多いです。文学分析では答えは無いといっても、生徒は教師が出した分析結果が答えと思いがちです。複数の意見を持つことの大切さを理解はしてくれているのですが、論理的に組み立てることができれば答えになる、ということを伝えるのは難しいです。

グループディスカッションなどで違う意見が出てきたときには、皆でいろいろ議論するなかで導き出せる考えもあって、教師が想定した以上のものを子ども達が導き出したときは私自身も楽しいなと思って授業をしています。また、ＤＰの段階になると Japanese の要件としてグローバルな問題に取り組む必要があり、ＴＯＫの考え方や History との連携ということで、文学と結び付けて講義することがあり、そのような教科横断により、新たな発見が生まれることもあります。

日々の学びが現実の世界につながっていく

生徒の興味・関心が広がっていることを感じる場面として、ＤＰの Japanese では、毎週、新聞やＷｅｂのニュースサイトで気になった記事をピックアップして感想を書いてもらいシェアしているのですが、文学の授業で話したことと関連した問題を持ってくることがあり、「実際の「実際の社会の中でもこう問題が提起されているけどどう？」と聞くと、物語の中では主人公はこうしてしまっ

たけど、現実の世界ではこうしたほうが良いなどの意見が出てきたりもするので、授業の中で考えたことを意識してくれているのかなと感じています。

一般的な日本の教育では、一つの文学作品から抜粋された部分を学ぶのに対し、ＩＢではまるまる一冊の文学作品を学びます。今ちょうど高校２年生で夏目漱石の『こころ』を取り扱っているのですが、作品の一部しか載っていない教科書では、構成の工夫や一人称の問題などに気づきにくくなってしまいます。文学を分析するうえでは、作者を意識した展開・構成を見る必要があるので、生徒は大変ですが、やはり文学作品は丸々一冊を読むべきだと考えています。

それでも一冊丸々読むのはエネルギーが必要なので、そのための工夫として、基本的に長期休みにかぶるようにして新しい本を導入し、読んできてもらうようにしています。また、時代背景や作家の思想、当時の思想などは作品を読んだだけでは把握しきれないこともあるので、私のほうで講義して、その知識を補ったうえで、作品に移るようにしています。また、グループ活動をメインで行うので、少なくとも自分が担当した部分だけはきちんと読んでおくようにして、発表が終わる頃までには全て、または重要なポイントはおさえているようにしています。

また、ＴＯＫはどの科目にも関与していくので、純粋な文学解釈・研究だけではなく、現代社会の課題としてどのようなものが捉えられるか、それぞれの時代で知識というものがどのように扱われているかなど、適宜投げかけるように意識しています。

地域や卒業生との交流を通じて、学びの成果の活かし方を知る

地域との交流は、コロナ禍で活動が制限されていたので、併設小学校など身内のコミュニティの中で、英語でバドミントンを教える、ごみの捨て方の表記を英語に直して日本語が得意でない人に伝える、などに取り組んでいました。ＩＢ生らしさを感じることとしては、積極性です。生徒たちに「どんなことをやってみたい？」と聞いたときに、ボランティアを通して教えたいとか、いろいろな問題が起きているから寄附をしたい、手紙を書きたいなど、それぞれの興味関心を活かせる方法や団体を見つけてくるのがうまいと思います。リサーチ力や主体性などはＩＢ生のほうが見せてくれるのではと思っています。

現役生と卒業生の交流としては、今は対面ではなくオンラインになりますが、自分がＩＢをやっているときはこんなことに気を付けていたとか、今こんな仕事をしているなど、卒業生からシェアしてもらうという場を設定しています。また、コロナ禍でストップしているものの、同窓会のコミュニティもあります。そこでつながりがあれば、自分が学んだその先にどんな未来、可能性があるのかという道標になると考えています。

世界の関心事や問題を複数の視点から見る

教師にとっても、ＩＢは大変は大変です。ユニットプランを作るところから始まるのですが、日本の教育は教科書が指定され、それから授業を作るのに対し、ＩＢは重要概念を決め、そこにどうアプローチするかを考えて教材研究を行い、授業を作っていきます。でも、準備は楽しいです。特にＭＹＰは生徒に創造性を意識させ、表現することを考えさせる部分もあるので、物語をリメイクしたり物語の予告編を作成したりなどを通じて創造性を高めていけるのは楽しいと感じます。

私自身のプライベートでＩＢっぽさを感じることとして、ニュースはＮＨＫ、民放、新聞なども複数見るようにして、海外のニュースも見ています。取り上げられることや情報の詳細によっては私たちの知識や考え方にもバイアスがかかるので、世界の関心事や問題がどこにあるのかということを複数の視点から見られるように意識しています。あとは、テレビを見ていて「なぜ、この時期にこのドラマを制作するのか」などと考えてしまい、その作品自体を純粋に楽しめなくなることがあります（笑）。

私自身は英語でＩＢ教育を受けてきたので、日本語のみプログラムをやって同じ効果が得られるのかということには疑問を抱かざるを得ません。ニュアンスの違いもありますし、海外では物事の取り上げ方も違います。日本と世界では関心事も違います。日本語だけで、複数の視点や考え方に触れることができるのかなと思ってしまいます。ロシア文学は英語翻訳で学ぶのですが、それをさらに日本語訳をするとどうなるか考えるときなど、複数の言語を扱うことによって得られる文化的背景や知識の隔たりを、単一言語だけで世界文学の理解を補えるのかという懸念はあります。

ＩＢは生徒だけでなく、教師の可能性も引き出す

ＩＢは、プログラムとしては魅力的です。ただ、真摯に取り組まないと効果が得られないので、全力で取り組まなければならず、メンタル的にも体力的にもきつい、削られるプログラムでもあります。また、自分の中で凝り固まった偏見に囚われて、複数の視点に立とうとしたり、一度出した結論を見つめなおしたりすることができないと、良い部分が引き出せません。教師自身が振り返ることができないと難しいものだと感じています。それでも IB は、自分の可能性を引き出せる、自分というものを深く知るきっかけを与えてくれるものであり、導入・経験する価値があるのではと思います。

※取材・編集＝文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム事務局（小澤・武藤・金子・深井・瀧本）文＝関口